

## 神へのホーリネス／神の前の聖き教会

パウロがコリントの教会の「不品行の問題」を取り扱ったのはこれが初めてではなかった。9節が暗示するように、明らかに前にもコリントに手紙を送って、この世におけるキリスト者の生き方について訓戒していた。

その手紙の中でパウロは、「不品行な者たちと交際してはいけない」と書いた。この勧告が誤解を招いた。コリントの教会の中のパウロ批判者たちはこの言葉をねじまげて解釈し、もしそうなら、我々キリスト者はこの世では生きる所が無くなってしまわないか、我々は皆、この世から出て行かなければならないことになるではないか、と批判したのである。

パウロは、この批判者たちのひねくれた取り方を逆に用いて彼らの過ちを指摘し、こう言う。「私が前にそのように書いたのは、この世の不品行な者貪欲な者、略奪する者、偶像を礼拝する者などと全然交際するなど言ったのではない、もしそうであるなら（確かにあなた方が言うように）、あなた方はこの世から出て行かなければならなくなる。

「しかし、私が書いたのは、この世の人々のことではなく、あなた方のことなのだ、つまり、あなた方の中の、兄弟と呼ばれる者で（キリスト者であると自称しながら）悔い改めることもなく、そのような不品行を続けている者がいるとするならば、そのような人とつきあってもいけない、食事を共にしてもいけない、ということである。

「外の人たち、つまりこの世の人を裁くのは私たちではない、この世のことは神が裁く、私たちがさばくのは教会内のことなのだ、教会が、神の教会として純潔を保ち、神の御名が汚されないように、神の栄光が損なわれないように、罪によって教会が支配されることがないように、教会は自らの内をさばかねばならない」と。

こうして、パウロは教会の戒規の必要性を強く教え、異邦人の世界でさえ嚙蹙(ひんしゅく)をかうような罪を犯している者を(5:1)、放任することなく、教会の交わりから除名しなさいと命じる。そして主なる神も御言葉をとうしてそのように教えているではないか！と言い(13節)、申命記の言葉を引用するのである(申命記13:6、17:7)。

教会の戒規について学ぶ時、私たちは教会とは何か、何のために教会は存在するのか、教会の目標は何か？ということを考える必要がある。パウロはエフェソ5:25～27で、キリストが教会を愛してそのためにご自身をささげられた、その十字架の贖いの目的がどこにあったか、を語っている。「キリストは教会を愛してそのためにご自身をささげられた、・・・キリストがそうなさったのは、言葉を伴う水の洗いによって、教会をきよめて聖なるものとし、しみやしわや、その類いのものは何一つない、聖なる、汚れのない、栄光に輝く教会をご自分の前に立たせるためであった」と。

ここで「教会」というのは私たちのことである。しみも、しわも、そのたぐいのものが一切なく、清くて傷のない栄光の姿の教会、これがキリストのからだとしての教会(=私たち)の目指すべき目標である！ 教会がそういう教会となり、教会に連なる者がそのように聖められ変えられていくこと、これが神の御心なんだ、これが神がご自身の民である教会に求めておられることなんだ、と使徒パウロはコリントの信徒たちに教えるのである。